

玉津島磯の浦廻の真砂にもほひて行かな 妹も触れけむ

(9一七九九)

玉津島の磯の浦辺一面に広がる砂浜、その浜の細かな砂に触れて、その白い色に染まっていこう。妻もきつとこの砂に触れたのだらうから。

紀伊国にして作る歌四首

- もみち葉の過ぎにし児らと携はり遊びし磯を見れば悲しも (9一七九六)
- 塩気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し (9一七九七)
- 古に妹と我が見しぬばたまの黒牛潟を見ればさぶしも (9一七九八)
- 玉津島磯の浦廻の真砂にもほひて行かな妹も触れけむ (9一七九九)

もみじ葉の散るように、この世を散り過ぎていつてしまった妻と、手を取り合
つて遊んだ懐かしいこの磯を、いま再びこうして来て見ると、また悲しみがこみ
あげてくる。

潮の香のみなぎる荒々しい磯ではあるが、行く水の去つて帰らぬごとく、帰ら
ぬ人となつてしまった妻、その妻の形見の地として、またここにやつて来た。

その昔妻と二人でながめたこの黒牛潟を、今一人でながめるとむしように寂し
い。

◎参考歌

- 大宝元年辛丑の冬十月に、太上天皇・大行天皇、紀伊国に幸す時の歌十三首
黒牛潟潮干の浦を紅の玉裳裾引き行くは誰が妻 (9一六七二)
- 信濃なる千曲の川のさざれ石も君し踏みてば玉と拾はむ (9三四〇〇)